

## くすり湯

水野 仙子

筆を嚙んだ唇を眞つ黒にして、土曜なのでお晝も喰べず、蜻蛉つりに飛び出した章が、水貫ひに寄つたのを、いゝ幸ひに捉へて、山のおばあさんにお使ひを頼んだ。

『いゝかい、忘れてなんねえぞい、薬湯がたったから、おなかおばあさんに遊びにおいなんしよつてない、よつくさういふんだぞ』

と繰りかへし、そのお茶盆の上の煮豆を、立つたまゝで一匙すくつて、ねっから上の空で諾々云つて居る章にふくませて、今日は催促されないうちから、火鉢の引出しを抜いて、膏薬やら脚のはだかつた簪やらを掻き廻して居たが、やうやう二錢銅貨を見付けて駄賃にくれた。

投げ出して置いた麦藁帽を搔っ手繰つて、ひらりと庭に飛び下りて、框に手をついて草履をはいて居る顔を、

『おやおや』と仰山に驚いて、

『待つて、待つて、まあその顔はなんつう顔なんだい、それぞれ、あ、涙が口にはいる！』とおばあさんはさもきたなそうに顔を顰めて見せて、ごそごそ袂を探つて居る。章はづすりとの啜り込んで、それでも待ち心に、まじまじおばあさんの手許を見て居たが、袖の中でいつまでも手がもくもくして居るので、堪らなく焦躁たくなつた。

『いゝ！』叫ぶや否や、ひくりと闕を飛んで馳け出した。

『あれ！ 章、章』

おばあさんは周章てゝ起つて來て呼んだがもう見向きもしない。

『ほんに性急な子だ』と、其子がよく似た倅の性格を一寸思つて、折角熨した紙をまた丸めて、袖口から袂に落した。そして綺麗に拭き届いた板の間に、小さな足跡がぼつぼつ浮いて居るのを、がちやがちやした家の、せゝこましい勝手に、わいわい騒ぎながら飯臺を圍んで、茶碗を抱へたり箸で井を叩いたり、いづれも丸い顔をした子供達の有様を思ひう

かべて、念入りに雑巾を絞ってそれを拭きはじめた。

お書をたべてから一時間ばかりは、鯉節をかいたりお茶盆を揃へたり、ひとりで體を動かして居たが、やれやれと一風呂浴びて来て縁近くたるんだ肌を風に吹かせて居た。

『なんつう眞んに、こっちの家は何時來てもせいせいとして氣持ちのいゝことねえ』  
おなかばあさんが腰をのして其處に立つた。

『さあさあ』と散らかってた帶を膝の上に搔き寄せて、山のおばあさんは愛想よく、  
『さあづつと……先刻からとても待つてやしたぞい、なんてまあめつきり暑くなりやしたことねえ、まゝごめんなんしよ、えゝ今一浴び浴びて來たとこなない、薬湯も時々はいゝもんでねえ』

おなかばあさんはがさつく煎餅の風呂敷包を縁に置いて、倒れた杖を直すのももどかさうにずり上った。足を開いてへたんこに座つて、おゝ暑い暑いと襟を後にやる。

山のおばあさんは、ふと其老人の紋切り型を可笑しく思った。自分はまさかそんなでもあるまいと思ふ、儂い矜りである。

『どうです、おなかさん、直ぐに一風呂はひつて來ては、今私あがつたばかりで恰度い  
いあんばいだったから……ね、そうして汗流したところでお茶にしやすい。さあさあ  
はいつておいなんしよ。手拭ひはその縁にかけて置いたつけから……』

『さうけえ、そんぢやら遠慮なしに頂くとしつか』

山の家持主の一家が時々やつて來て、一日遊んで行くことがあるので、湯殿なども一寸洒落れた造作になつて居る。山の家とは或る富豪の隱宅——遊び場所で、金の費つた庭は随分廣い。池もあれば築山もあり、茶室も建つて居るし、二つ三つの凝つた石碑には、一寸近郷の名の知れた先代の發句が刻まれてある。水月園と名付けて、一言斷れば從覽は御随意になつて居る。

山のおばさんは其留守居である。子供達は山の家山と言ひつけたので、おばあさんもお春といふ名は滅多に使はれず、知つて居る人はみんな山のおばあさんといふ。

蟬の聲にふと氣がついた。おなかばあさんは、今年になつてから初めて聞いたのだと思つた。青々とした畑に圍まれた小高い家と、白壁と雑音に挟まれた町の家とから、ものご

とに執着の強い魂が、手際よく放されて、初めて夏といふ感じが新らしくした。稍々白く瑠璃色に濁った湯が、高い香りを——老人は得てこんな匂ひが好きなものだ——湯氣に包んで、内から外から、纏まった考へを溶かして行く。

『みんな蝉が能くなく年あ豊作だつてねえ』

ふとこんなことを言はうとして、聲が届かないのを思つて止めた。欠伸が續いて出た。臺所では先刻からコトコト音がして居る。今度は俎まないたに包丁をひし音の節が、新漬けの、鐵漿おはぐろのやうな色をした茄子を思はせて、食慾を感じた腹が、言ひやうのない目先のある楽しみを齎もたらした。

ふと後の細い通りに足音がした。と思ふ間に憚りなくその木戸を開けて、鏝つばのせまい麦藁帽と、白緋しろかすりの上半身とが、窓の竹格子をかすつて行く。直ぐ辰さんだなど思った。縁の方へ廻つて行く姿を逐つて居ると、妙な聲を出して呼んで、帽子をぬいで上へあがつた。背せの高い、肩の張った立派な體格で、髪は長くべったりと分けて居る。オリーブの絞りの兵兒帶へこおびなどを締めて、どう見ても立派な若者だ。ふと小野屋のお繁さんが、「あれでなかなか女好きなんですぞい」と言つて笑つたことを思ひ出した。

おなかばあさんは赤くなつてあがつて來た。

『やれやれさつぱりしたことう。來たない辰さん、どうしたい？』

絞りの浴衣に胸をはだけてそこに坐ると、何やら不平さうに手で口をきかして居た辰さんが、急ににこにことしてぼくりと一つ頭を下げた。

『えゝこれもはあ……』と山のおばあさんが引きとつたが、別段續ける言こともなかったので、『ねっから構かまへもしないだし、どうでしたい湯の安排あんばいは、ぬるくありやせんかったかい』  
『えゝえゝとつてもいゝあんばい、なあんついゝお湯だったか……あゝあゝ久し振りでのんびりとした。』

辰さんは氣を利かして團扇うちわをもつて來てくれた。するとおばあさんは思ひ出したやうに手眞似うまで巧くお湯にはいつて行けといふ。辰さんは一寸躊躇ためらつて居たが、やがてつと手拭ひを受け取つて湯殿へ行つた。

『辰さんは今年幾歳いくつになつたんですい、なんて宜い體たいだことね、眞まんにいゝ若者になつた』

おなかばあさんは後を見送って居る。

『なあにはあ、體ばかり大きくて仕様が有りやせんわい、役にたゝずだから……さうだねえ、今年は今年は六か……いや七になったんですべで必と、二十七に……』

『ふうむ、早いもんですない。何ですかい今でもあのやっぱり小野屋に……さうけえそれはようがすない、今ではなんでもはあ出来やすべいから』

「なあい根っから眞劍になんねで困るんでっさい、そんなでも遊ばせて置くよりはと思つてね、あれで此頃はなかなか生意氣になつて……」

山のおばあさんは飯臺を持ち出して来て、それに細かな皿を並べたてた。

『小野屋のお繁さんはまた子供が出来たんだってねえ、よくこまかに産す人だわい眞んに、今度は年子だっぺい……』

『えゝ、年子ですぞい、そんなでもあの人はいつも産が軽るくて幸福い、産婆さまが間に合はない位なんだもの。いつだって……眞んにあんなに産の軽るい人もないもんだ』

山のおばあさんは頻りに起つたり坐つたりして居たが、チリンチリン盃を觸れさせながら盃洗を持って来て、銅壺から徳利を抜いて袴を着せた。

『さあおなかさん』と坐り直して、

『ま、づつと此方へお寄りなんしよ、何はなくとも一盃……』

『おや貴女、お春さん何しんですい、構はないでおくんなんしよ』

『いゝえ、なあんにも無くて何だげつとね、まあ一盃あげやすべわい』

『大へんですない、いつでもいつでも御馳走になつて……』

これからが楽しみ、といふやうな顔して二人は向ひ合つた。女としては二人とも随分いける方である。

素麵の三杯だとか、胡瓜揉みだとかいふやうなものを肴にして、酔の廻るのを惜しさうに、直ぐ今言ったことを忘れるやうな無駄話をしながら、ちびりちびりと二人は盃を交した。辰さんがあがつて来て暫くそれに交つた。辰さんはさも甘さうに手付よく盃を持つ。

山のおばあさんは何處か氣まづそうに、それでも心よく注いでやつて居たが、いつまでもけろりとして居るので、歸れといふのであらう。手眞似でまた話が始まった。やがてお

ばあさんは口小言を言ひながら起ち上つて、箆笥の引き出しを開けたが、一寸隠すやうに後向きになつて錢の音をさせている。口の小さいちよぼした辰さんの顔を見て居ると、氣の毒なやうな、可笑しいやうな氣持ちになつて、おなかおばあさんは思ひ出したやうに膝を頰くわして濫團扇しぶうちわを使った。

辰さんが歸つたあと、山のおばあさんは俄にはかに燥はしやぎ出した。よく笑ひよく饒舌しやべる。今日もまた出るなど思つた通り、例によつて東京の自慢話が出た。上野の櫻はなの賑はひ、淺草の觀音様の大提灯、仲見世の毎日の人通りは、此地の鎮守祭禮の時の、屋臺の前に群がる人出程ある、といふやうなことは、もう度々だから想像も働かないが、いかにしても、それが第一の自慢の、其贅澤ぜいたくな息子の生活が腑ふに落ちぬ。女中が幾人も居て、子供が皆乳母車乗つて、奥さんは平常ふだんに縮緬ちりめんの着物を着て居る。華族様ぢやあるまいしと思ふ。さうしてこれが其立派なぼんとした座蒲團ざぼたんに坐つて、御隠居様御隠居様と煙草たばこまで吸ひつけて出された其人かをつくづく、お春さんの顔を見るけれども、今ではやっぱり自分達と同じく絞りの浴衣を着て、せまいメレンスかなにかの帯を締めて居るのを見ると、どうしても世の中よのせまいおなかおばあさんには、自分が知つて居るそこらの家庭以外に想像が及ばないから、どうも眞實ほんととは思へぬ。たゞ煙に巻かれたやうに、「さうけえさうけえ、大へんなこつたねえ」を繰りかへして居る。解わかり切らないから感服もしない。

十八の時に或る町の士族の嫁に行つて、子供まで出來ただけけれど、姑がやかましいからと言つて逃げて歸つた。その子供のことである。後の嫁にはなんでも三人ばかり女が生まれたさうで、母子おやこの仲がうまく行かず、息子は出世しゅっせして東京で生活して居る。それがあつた冬何處でどう聞いたか、突然山のおばあさんを尋ねて來て、二人は母子おやこの對面をした。其次の年の春、是非にといふので上京して、一月ばかり其家そこで暮した其時のことである。尤もつともそれから其息子からは、金の自由の利くせいとか、時々送り物などして、母といふのも名ばかりな母に盡つくして居る、とにかく珍らしく優しい人である。

だからこそ猶更おなかばあさんは話が太袈裟たいがしやなんだと思つて居る。そんなにして居てどうして生活くらしがたつていけるものかと、直ぐに持ち前の固い心に戻つて來る。ふとおなかばあさんは、嘆息してこんなことを言ひ出した。

『ほんに世の中も贅澤になって来たもんだ、助の嫁をとる時あ、みんな私が直し物で間に合したのにやれ新しいものでなくちや可笑しいの、縮緬でなくちや恥かしいのって途方もない、ほんに今の若い者あ贅澤ばかり語って、駄目でごすぞい、私ははあ、その家の紋さへついてればなんでもいゝんだからっていふんですげつともない』

この頃嫁が、自分に隠して絹などを買い集めて居るのを思ひ出したのだ。

『ほんに今年あたり久さんにも嫁とつてやんなくつてはなるやせんない。いくらか立派なお支度が出来やすばい』

お春ばあさんはわざとこんな言を言つて見る。兎に角町に聞えたあれだけの財産になつて、猶孫嫁の結納を古物で間に合せたい位の考へで居るおなかばあさんの心を可笑しく思つた。何家の嫁様の帯は幾何したとか誰その染め直しものがよく出来たとか、暫く着物の話に移つた。お春おばあさんはやがて筆筒からセルの單物を出して来て見せた。それは去年から心掛けて、今年出来たものである。おなかおばあさんには、こんな光りのない品が、どこがそんなに価値があるんだらうと不思議に思はれた。そしていつまでも着物なぞを拵へて喜んで居るお春さんの心を、羨しいやうな氣も起りあはれなやうな感じもした。今更に氣の若い人だと思つた。一時たてられた噂なども思ひ出した。

出戻りのお春さんは間もなくまた町の荒物屋へ嫁いた。さうして男一人に女を三人生んだ、それらを集めたなら、今では孫が十人近くあるが、子供なぞはあまり好きな方ではなかつた。

亭主が死んでから、店を倅夫婦に委して、自分は二階で三味線の師匠などをして居た。

その頃から山の家に隠居をして居た。

近江屋の石民（俳名）の妾をして居るなど、言はれて、或人はまた、啞の辰さんはあれは眞實は荒物屋の子ぢやないんだなど、言い觸らした。近江屋の石民が死んでからは、留守居となつて山の家に住みきりである。

『お春さん、貴女は今年幾歳なんだつけねえ』

おなかばあさんは突然こんなことを聞き出した。

『え、私ですかい、私は貴女より四ツ下なんですさい』

『さうすると、五十……』

『六』と高く引きとりて、

『お互いに耄おいはれさね』

脚くはへて居た楊枝を投げ捨て、起つて、お春さんは提灯箱棚の脇から三味線をはづして來た。褪さめた鬱金うこんの袋をとつて、ぽつんぽつんと弛ゆるんだ絃をしめて居る。

庭には青桐の葉の影が一ぱいになった。俄に酔よひを覺へて、

『ご免なんしょ』と手枕たまくしにごろりと横になった。おなかおばあさんはまた染めた毛を艶々と小さな鬘まげを結つて、湯上りの顔に、赤味あかばしつた眼のあたりをつくづく眺めて、お春さんの唇は赤いと思つた。

「水野仙子全集」第二卷より

初出：「文章世界」明治四十二年八月

テキスト入力：小林 徹

公開：平成二十九年五月十三日